

ビキニの真相を報じない日本メディアの犯罪

高田 純 理学博士 札幌医科大学教授

ビキニ と言えば、夏の海辺で露出度の高い女性の眩しい水着。しかし、新聞社やテレビ局の幹部のみならず、この言葉から、太平洋マーシャル諸島海域のビキニ環礁であった、昭和29年（1954）3月1日、米国の巨大核爆発実験 15 メガトンと核の灰を被った第五福竜丸事件を連想するはずだ。

売血輸血による治療を受けた第五福竜丸船員 23 人のほとんどが急性肝炎になり、無線長の久保山愛吉さんが亡くなりました。私の現地マーシャル調査では、最も危険な線量を受けたロンゲラップ島民に急性肝炎はありません。



マーシャル諸島現地調査、1997年、2005年。被災した島民たちに急性肝炎なし。第五福竜丸船員の急性肝炎死亡事故は、売血輸血による肝炎ウイルス感染が原因だった。

第五福竜丸の医療担当を継続した放射線医学総合研究所でも、死因は売血輸血による肝炎ウイルス感染にあったことを認めています。2004 年放医研明石真言博士らの報告によれば、船員 22 人中、肝がん 6 人、肝硬変 2 人、肝線維症 1 人と肝臓の病気で計 9 人が亡くなっています。

しかし、日本では、「死の灰」・放射能ヒステリーが始まったのでした。いまだに、医学的に誤った報道が続き、あらためないのが、日本の新聞です。非科学の報道が、福島で再燃し、平成の放射能ヒステリーとなったのです。

高田純著 「世界の放射線被曝地調査」講談社 2012.
「核爆発災害」中公新書 2007. 「東京に弾道ミサイル！ 核災害で生き残れる人生き残れない人」オークラ出版 2012.

読売新聞 が、昭和 29 年、最初に第五福竜丸の被災記事を報じました。3月16日付の朝刊です。

「邦人漁夫、ビキニ原水爆実験に遭遇、23 名が原子病、1 名は東大で重症と診断」「水爆か」「東大で精密検査、きょう権威が集まって」と社会面の大半を埋めた、読売のスクープ記事でした。

私の世界の放射線被曝地調査は、国内の新聞が幾度も取り上げています。当然マーシャル調査も、読売は大きく取り上げています。（2001 年 3 月 1 日 The Daily Yomiuri）しかし、第五福竜丸事件の真相を中公新書「核爆発災害」2007 年に取り上げましたが、同紙は一度も取り上げていません。これはおかしいです。偏向報道というより、真実の隠ぺいと言わざるを得ません。その後、親会社が読売新聞である中公新書の「核爆発災害」は、比較的読まれていたにも関わらず、絶版になってしまいました。何かの力が作用したと思いたくなる事件です。この本は極めて重要と考えていますので、若干形を変えて、オークラ出版から、「東京に弾道ミサイル！ 核災害で生き残れる人生き残れない人」として、2012 年に、出版しました。

放射線防護情報センター 2014 年 3 月 1 日